

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Professor Morikimi Megata : A Tribute

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1984-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤松, 光雄, Akamatsu, Mitsuo メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2123

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



目賀田先生を送る辞

赤松光雄

目賀田先生には、一世代にもわたる本学での教員生活に自ら終止符をうたれて、この春ご退職されました。永年本学の発展に尽されました先生のご努力にたいし、心からの敬意を表します。

先生は、終戦後、京都大学法学部政治科を卒業されたのち、志を新たに再び同大学文学部で英文学を学び、昭和28年3月に卒業されると直ちに同大学大学院に進まれ、高度の英語・英文学の研鑽に励まれました。大学院に入学された年の4月、本学英米学科の助手としてご就任になり、昭和30年4月講師に、昭和33年4月助教授に、昭和43年4月教授にご昇任されました。

その間、現・近代英文学の詩・エッセイをご専攻の分野に選ばれました先生は、イギリスの作家群—— D. H. ロレンス、クリスチナ・ロセッティ、F. L. ルーカス、リチャード・オールディントン等々——の作家像と作品に關するすぐれた論文を次々と精力的に発表されました。

特に、世紀末より今世紀にかけて活躍した学者・詩人のA. E. ハウスマンの研究において顕著な業績をあげられました。「A. E. ハウスマン序説」、「デルフィとテルモピレー——A. E. ハウスマン『神託』の一解釈」、「ハウスマンと祝婚歌の伝統」などの9篇に及ぶ論文を発表され、この作家が英詩史上、独特の位置を占め、西洋古典文学を豊かに反映し伝承している経緯を、その詩作品の細密な検討とともに、詩人の背景と環境への鋭い考察を通じて、深い講究を進められました。

実証的な学風の先生は、文学作品の理解における伝記的解釈の重要性をつとに認識され、この面での地道な業績もつみ重ねられました。それらは、前記の諸論文にもその成果がうかがわれますが、初期に発表された「文学と芸術の心理学」、「F. L. ルーカス『文学と心理学』」、比較的最近の「スティーヴン嬢の愛——『ヴェージニア・ウルフ書翰書』Ⅰから」、「若き芸術家の自画像——イーヴリン・ウォーの日記から」の論文に、伝記的側面に関するすぐれた論述がみられます。

昭和38年から40年にかけての二年間をはじめ、先生は三回にわたりオックスフォードとケンブリッジの両大学に留学され、英文学全般についての知見を広めるとともに、英詩の研究を深められました。れの傍ら、A. E. ハウスマンに関する貴重な未発表の資料や文献の入手にも努力され、集められた資料の一部に関する解説を「A. E. ハウスマンの蔵書」として発表されました。

外国語、外国文学の理解は、その国語を単に読むだけでは不十分で、話し、書くことによって深められると、先生は常々力説されていました。達意の英文で書かれた論文が多いのも、先生のこの確信の実践でしたが、同時に研究対象とする作品にかかわる海外の学者や、文学者とも広く文通され、じかの意見を聞き、なまの息吹きに触れるよう日頃心掛けておられました。リチャード・オールディントンに関する一連の業績は、先生のこうした姿勢の所産でありましょう。

ユニークな先生の業績は学界の高い評価を受けましたが、教育面では、ご勤務のほぼ前半はⅡ部専任、後半は学部専任として、主として「英詩」、「英作文」の授業を担当され、昭和43年本学に大学院が創設されると同時に「英米文学演習」、のちに「英米文化研究」の科目を受持たれました。

英文学の精髓といわれながらとかく敬遠されがちな英詩を、学生の理解と鑑賞力を養成するよう、先生は情熱を込めて講義されました。また英作文の授業では、大いに学生を鍛えられました。学生の指導ぶりは、先生の研究・教育の姿勢からにじみ出る厳格さの一面で、常に学生の立場に立って理解し

ようとされ、周到で適切な助言を与えるよう、気を配っておられました。

本学もやがて西神地区へ移転し、整ったキャンパスで、新しい発展への大いなる歩みを踏み出すことになります。顧みますと、ひと世代前、先生のご就任された頃の本学キャンパスには、今の本部・研究所、図書館、学生会館も無く、教室の夜はほの暗い裸電球のもとで、停電におびえながら授業をしていました。けれども昼間は、東六甲の鮮やかな緑の山塊が体育館を被い、うぐいすの鳴き声が聞こえてきました。あの頃先生は、育ちの良さを偲ばせる独特な抑揚の、凜と響くお声の名調子で、英詩の講義を進められていました。なぜかあのお声が忘れられません。

先生にはここ数年、ご健康が勝れず、ご不調を訴えられることが多かったようです。そのためご勤務にも何かとご不自由を感じられたことと拝察いたします。ご家庭の事情もあって、このたび定年まで二年を余し本学を去られることになりましたことは残念でなりません。先生のご健康の速やかな恢復を心よりお祈りするとともに、どうか今後とも名誉教授として、本学の発展を見守り、末永くご教示を賜りますようお願いいたします。